

# 訳語の研究

——西周を中心に——

栗 島 紀 子

## 序

明治の初め、開国と同時に大量に流れ込んだ西洋文明、西洋文化、そして西洋の学問等を、我等の先人はめざましい勢いで吸収していった。そのような先達の一人に西周がいる。西周は、明治初期の啓蒙思想家として輝かしい存在であるばかりでなく、明治年間における哲学興隆の率先者でもある。実に、日本の哲学は西に始まるとさえいわれている。また哲学の外に、論理学や心理学をも日本に紹介し、その用語を数多く作ったといわれている。ここでは、西がどのような語をどんな風に作ったのか、またそれらの語は西の造語なのか、それとも漢籍などからの転用なのか、現在まで生きのびている語はどのような語なのか、等々明らかにすることを目的とした。西周の訳語方法と、その語の現在における存廃の状態を知ることによって、明治時代の言葉づくりがいかに

進められたか、また日本人の造語力、あるいは語の選択規準がどのようなものであるかの一端をうかがい知ることができるのではないかと思つたのである。

方法は、まず西周の著作の中から訳語を抽出した。訳語抽出にあつては、「性理学ニテ意思(will)ト云ヒ、思慮(thought)ト云ヒ、思量(consideration)、思惟(contemplation)ト云ヒ……」(「致知啓蒙」)のように原語がそのまゝ載つているもの、および「数学ハ星学ノ階梯トナリ、格物学、化学ハ、生体学ノ門戸トナリ……」(「生性発蘊」)のように、原語のよみが片仮名で載つているものを拾つた。このようにして、慶応二年から明治十五年までの著作の中から、重複している語も含めて約一千七百語を採集し、これを整理して異り語一千四百四十一語を得、これをもとにして研究を進めた。

まずその第一に、西周の訳語と一般辞書ならびに哲学辞書との比較をした。これによつて影響関係を調べたのである。第二には、西周の使っている訳語が、明治初年に存在した語であるか否かを、当時の英和辞書を主にして調べた。また、西周の訳語には古い典拠があるかどうか、諸橋轍次氏の「大漢和辞典」にあたつてみた。そしてさらに、西周が訳語として使っている言葉が、今日一般語として存在するか否かについて、岩波の国語辞典によつてみた。最後に、訳語として今日まで残っている語と、途中ですてられた語の性格あるいは条件について、西周の訳語を中心に考察してみた。

使用した資料は次の通りである。

○西周全集（一卷・二巻） 大久保利謙編（宗高書房刊 昭和35・36年）

○西周全集（別一卷） 大久保利謙編（日本評論社刊 昭和20年）

▼学原稿本（明治二年頃 稿本）

▼百学連環（明治三年頃 塾で講義）

▼五原新範（明治三年頃 稿本）

▼哲学関係断片（明治三年～六年 ノート）

▼生性発蘊（明治六年頃 稿本）

▼百一新論（明治七年 刊行）

▼致知啓蒙（明治七年 刊行）

▼知説（明治七年 明六雑誌に発表）

▼人生三宝説（明治八年 明六雑誌に発表）

▼利学（明治十年 刊行）

▼心理学（上・下）（明治十一・十二年 刊行）

▼政畧論（明治十二年頃 稿本）

▼その他、慶応二年から明治十五年までの間の著作

#### ○辞書

▼訂英華字典 羅布存徳著 井上哲次郎増訂 明治17年

▼英和对訳袖珍辞書 堀達之助等編 慶応3年

▼和英語林集成 ヘボン (J.C. Hepburn) 明治5年

▼英和字典 吉田賢輔 明治5年

▼英和字彙（初版） 柴田昌吉 子安 峻 共著 明治6年

▼英和字彙（第二版） 柴田昌吉 子安 峻 共著 明治15年

▼和訳英字彙 島田豊纂訳 明治21年

▼和訳字彙 棚橋一郎 明治21年

▼新簡約英和辞典 研究社 昭和30年

▼改訂増補哲学字彙 井上哲次郎 有賀長雄 増補 明治17年

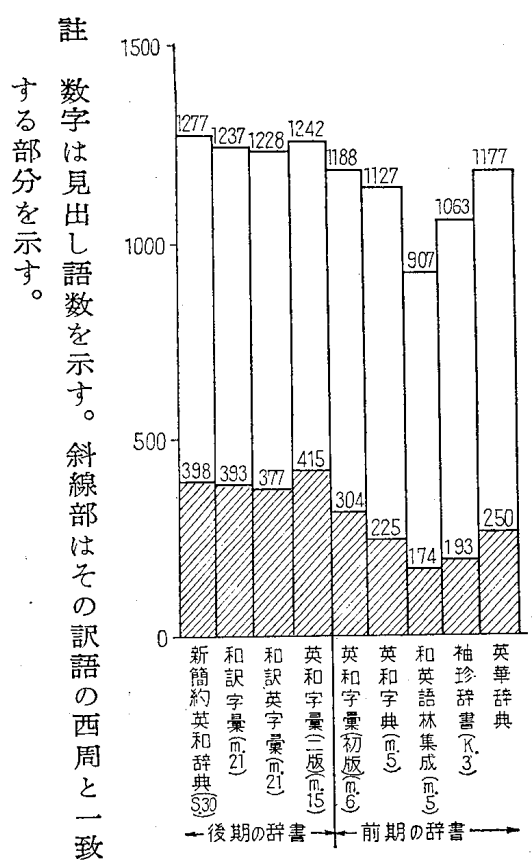
▼哲学大辞書（索引） 同文館 明治45年

- ▼岩波小辞典「哲学」 栗田賢三編 昭和39年
- ▼岩波国語辞典 西尾実 古在由重編 昭和39年
- ▼大漢和辞典 岩渕悦太郎編 昭和40年
- ▼諸橋轍次 昭和30年

一 辞書との関係

(一) 一般辞書との関係

各辞書と西周の訳語との関係を示すと次のようになる。



今かりに、明治六年の英和字彙（初版）までを前期の辞書、明治十五年の英和字彙（二版）からを後期の辞書とし、それぞれ西

周と一致する訳語の性格を概観してみる。

☆前期の辞書と西周の訳語とが一致するもの

anger	怒	animal	動物
arithmetic	算術	axle	軸
blood	血	brain	脳
brother	兄弟	carpenter	大工
center	中心	certain	或ル
comparison	比較	complete	全キ
copper	銅	digestion	消化
father	父	force	力
iron	鉄	liberty	自由
length	長さ	light	光
line	線	love	愛

以上は大体一般的な語であるといつてよい。この一般的な語の一致は後期の辞書にもみられるものであり、具象名詞が多く、日本語の基本語彙ともいえるものである。

しかしながら、後期の辞書にはこれらの外に次のような、かなり専門的な語の一致もみられる。

☆後期の辞書と西周の訳語とが一致するもの

abstraction	抽象	extension	外延
-------------	----	-----------	----

attribute	属性	generalization	概括
consciousness	意識	induction	帰納法
deduction	演繹法	intuition	直覚
definition	定義	philosophy	哲学
faculty	能力	proposition	命題
axiom	単元	cell	細胞
classification	彙類	comprehension	内包
conclusion	断言	concrete	具体
constitution	憲法	duty	義務
emotion	情緒	instinct	本能
idea	観念	impulse	衝動

明治六年から十五年までの間に、何らかの形でこれらの語が用いられるようになり、辞書に取り入れられたものと思われる。今、明治六年の英和字彙（初版）と明治十五年の英和字彙（二版）とを、西周の訳語を通して比較してみると、次のようになるが、西周がもっとも活躍したのは、明治七・八年から十二・三年までだから、第二版に新たに出てくる訳語は、西周独自の訳語が辞書に採用されたのではないかと疑われる。

☆英和字彙（二版）に一致する語

イ 公刊された著作の中の訳語

	△初版▽	△西周▽	△第二版▽
absolute	完キ 限りナキ	25 純全ノ	完キ 純全ノ
abstraction	拔萃 抽除	25 抽象力	拔萃 抽除 抽象力
aesthetics	——	25 美妙論	美妙学
attention	留心 謹慎 用心	25 注意	留心 謹慎 注意
attribute	帰与 附物 性質	10 属性	帰与 性質 属性
axiom	確論 格言	25,10 単元	確論 公論 単元
classification	分類 分等 分部	10 彙類	分類 分等 彙類法
conclusion	結局 決定 落着	10 決 断言	結局 帰結 断言
concrete	凝集物 結成物	25 具体	凝集物 具体
consciousness	知覚 自覚	25 意識	意識 知覚
conversion	変更 改心 改宗	10 轉換法	変更 轉換 改心
deduction	除去 減少	10 演繹ノ法	除去 減少 演繹法
definition	決定 定限	25,10 定義	決定 定限 定義
discursive	遊行ノ 理論ノ	25,10 弁証ノ	遊行ノ 理論ノ 弁証ノ
emotion	動(心ノ) 感動	25 情緒	動(心ノ) 感動 情緒
extension	拡グルー 延ルー	10 外延	延長、外延(論法ニ云フ)
fact	実事 事情	25,11,10 事実	所行 事 実 事情
faculty	才能 権柄 勢力	25 能力	能力 才能 勢力
fancy	想像 意思 意匠	25 意象	想像 意思 意匠 意象

generalization	一般ニスル	25,10 概括	一般ニスル	概括
ideal	意ノ想像ノ	25 理想	意ノ想像ノ	理想ノ
identity	一樣ナル	10 同一	一樣ナル	同一ナ
induction	引入導引	11,10 歸納法	引入導引	歸納法
intuition	看ル	25 直覺	看ル	直覺力
mysticism	秘教 奥妙ノ道	25 神秘学	秘教 神秘学	
obligation	担承 關係 負債	16 義務	担承 義務	本分
passion	情 嗜好	25 情欲	情 情欲	
phenomenon	顯像 空中ノ顯像	25 現象	現象 空中ノ顯像	
philosophy	理学 理論	6, 9, 10 哲学	哲学 理学 理論	
physiology	動植物学	9 生理学	生理学 動植物学	
proposition	建言 陳説 題	16, 10 命題	建言 陳説 命題	
principle	根言 道理	25 原理	原由 根言 原理	
probable	或ハ有ル 実ラシキ	25 蓋然	或ハ有ル 蓋然ノ	
predicate	被確定ル	10 命証	賓位 命証	
quality	性 本質 性質	10 形質	性 本質 形質	
reason	緣故 道理 条理	11, 10 理性	理趣 道理 理性	
reduction	復ス	25 還元	節約 還元 還元法	
sense	感覺 會得 意見	25 覺性	官能 感覺 覺性	
sortes	三段論法ノ略	10 渾体	渾体(論法ノ語)	

space	間 広 空 所 時間	25 空間	間 広 空間 時間
species	種類 属	25, 10 種	種 属 種類
subject	臣 民主 主格	10 主位	臣 民主 主位 主格
subjective	自己ノ 本心ノ	25 主観	自己ノ 本心ノ 主観ノ
suggestion	告知 言含 建言	25 提起	告知 暗告 提起
synthesis	組成 会意	25, 10 綜合法	組成 会意 綜合法
time	時 広 時代	25 時間	時 広 時間 時代
touch	感 觸 感 応	25 觸覚	觸 覚 感 觸
universal	総 体	10 全称	総 体 全 称
utilitarianism	利人ノ 道	16 利学	功利学 利学
volition	主 意 意味	25 執意	主 意 意味 執意
voluntary	自然ノ 随意ナル	25 有意ノ	自然ノ 随意ナル 有
will	意 主 意 決意	25, 10 意思	意 意 志 主 意

註 西周の詁語の上の数字は、次の著作を示す。

9 — 百一新論 (明治七年刊行)

10 — 致知啓蒙 (明治七年刊行)

11 — 知説 (明治七年「明六雜誌」に発表)

16 — 人生三宝説 (明治八年「明六雜誌」に発表)

25 — 心理学 (明治十一、十二年刊行)

□ 公刊されなかつた著作の中の詁語

	△初版▽	△西周▽	△第二版▽
administration	施行 指揮 管理	27 内政	施行 指揮 内政
cell	小房 小舎 小孔	8 細胞	小房 穴 細胞
constitution	政体 国法 律例	26 憲法	憲法 政体 国法
duty	職分 義理	7 務 義務	本分 職分 義務
dynamics	物動論	8,7 動学	動学 動勢論
equilibrium	平均 同量	7 平称	平称 平均 同量
function	行為 職業 才能	8 官能	行為 職業 官能
gelatine	膠	8 膠質	膠質
geometry	測量術	8,7 幾何学	測量術 幾何学
idea	意見 想像	8,6 觀念	意見 想像 觀念
imitation	倣フ 従フ	7 擬似	擬似 模倣
impression	押着 思慮	6 印象	押着 思慮…印象
impulse	激動 推力	6 衝動	衝動 激動
instinct	性 本性	20,8 本能	性 本性 本能
jurisdiction	裁判ノ權 権力	7 権域	裁判ノ權 権域
limit	限界 際	7 制限	限界 制限
nutrition	補身法 養物	8 滋養	補身法 養生法 滋養
observation	注目 留心 考説	8 觀察	注目 留心 觀察
operation	動作 工作	8 運用	動作 工作 運用

origin	根元 原由 起端	7 濫觴	根元 原由 起端 濫觴
pain	疼痛 辛苦	6 苦痛	苦 疼痛 苦痛
policy	政法 計略	26 政略	政略 權道
pretension	需要 虚託	7 口実	需要 口実 虚託
sensibility	感覺アル	6 感性	感性 知覚
statics	秤量学	8,7 静学	静学 秤量学
sulphuric acid	——	7 硫酸	硫酸

註 西周の訳語の上の数字は次の著作を示す。

6—哲学関係断片(明治三年ノート)

7—百学連環(明治三年頃 私塾で講義)

8—生性発蘊(明治六年頃 稿本)

20—人智論(明治十年頃 稿本)

26—政略論(明治十二年頃 稿本)

27—日本文学会社創始ノ方法(明治十二年十一月十五日

講演)

明治六年から十五年の間には、十年という長い年月があり、その間には西洋の文物の流入ははげしく、それに伴う語彙の増大、訳語の作成も著しかつたことと思う。それに、西周以外の識者達の著作や翻訳も数多く出たことであるから、今あげた訳語のすべ

てが西周固有のもので、それが英和字彙の第二版に取り入れられたとは言えないかもしれない。しかしとにかく、初版にはなかった訳語が第二版には出ており、それと一致する語が西周の著作あるいは翻訳の中にあるのである。しかもそれらは、「致知啓蒙」

や「心理学」等、刊行された書物の中で使っている語が圧倒的に多い。それ故、西周の訳語が影響を与えた、すなわち、西周がその著作の中で使った訳語が一般的になり、それが英和字彙の第二版に取り入れられたと考えるてもよさそうである。少なくとも、演繹法、帰納法、外延、概括、命題、命証、全称、定義、渾体などの論理学用語や、抽象力、具体、意識、直覚、理性、主観などの哲学あるいは心理学用語などは、彼の作ではないかと思われる。なぜなら、これらはやや特殊な言葉——いわゆる術語——であるし、明治十年前後に、論理学や哲学関係の書がそれ程沢山出たとも考えられないからである。そもそも、哲学 という語がすでに西周のものである。これは、明治六年頃に書かれた「生性発蘊」という著の中に、「哲学原語、英フィロソフィ、仏フィロソフィー、希臘フィロ愛スル者、ソフォス賢ト云義ヨリ伝来シ、愛賢者ノ義ニテ其学ヲフィロソフィト云フ。周茂叔所謂ル士希賢ノ意ナリ。後世ノ習用ニテ専ラ理ヲ講スル学ヲ指ス。理學理論ナト訳スルヲ直訳トスレト、他ニ紛ルヲ多キ為メニ今哲学ト訳シ、東洲ノ儒学

二分ツ」とあるのからも明らかのように、西周自身の考えによるものである。そしてこの 哲学 という語は、「百一新論」や「致知啓蒙」「心理学」の中でさかんに使われ、次第に普及していったのである。

公刊されなかつた著作の中の訳語については、英和字彙の第二版に直接影響を与えたのは西周ではなかつたかもしれないが、その基は西周にあるように思われる。なぜなら、印象、衝動、観念、感性、官能、本能など、やや特異な語が多いことを考えると、西周の訳と英和字彙が全く無関係であつたとは考えられない。後に詳しく述べるように、井上哲次郎などを通してこれらの語が公けにされたのかもしれない。

次に西周の訳語と辞書との影響関係を全体的に整理すると次のようになる。

A 西周の訳語と、それ以前・以後の辞書の訳語とがほぼ完全に一致するもの

a 英華字典と一致するもの (二三〇語)

angel	天使	god	神
agriculture	農業	gold	金
astronomy	天文学	imagination	想像
benevolence	仁愛	iron	鉄

copper	銅	king	王
electricity	電気	people	人民
freedom	自由	sun	太陽
geometry	幾何学	understanding	悟性
prose	散文	root	根
pulley	滑車	state	国

b 袖珍辞書と一致するもの (八〇語)

△英華辞典▽

affinity	親和(力)	(親戚 姻親)
analysis	分解(法)	(詳解 透解)
anatomy	解剖学	(剖屍之法)
attraction	引力	(相吸 索引)
consonant	子音	(同音字母)
existence	存在	(在者 有者)
fraction	分数	(零数 奇零)
hydrogen	水素	(術 輕氣)
navy	海軍	(navy of a state 一国之船)
sensation	感覚	(覚者 見者)
sermon	説法	(訓言 訓語)
vowel	母音	(自母之字)

wealth 富 (財帛 錢財)  
zoology 動物学 (生物之知)

数量的には、英華字典と一致する語の方が多いが、右のように英華字典とは一致せず英和辞書とのみ一致するものもある。そして、これらをよくみると次のようなことが言えそうである。

英華字典と一致する語は、全般にわたっているけれども、特に、金、銀、銅、鉄、白金、水銀などの金属名と、天使、基督、耶穌、耶穌教、三位一体などのキリスト教関係の語が目立つ。これに対して、英華字典と一致しないのは、酸素、水素、窒素、臭素、弗素などの元素名と、動物学、植物学(または本草学)、解剖学などの学問名とが目につく。

元素名や学問名などは江戸時代の蘭学に使われていたものが、そのまゝ用いられたものと思われる。やはり、日本にすでに存在した語で十分なものはその方が強かつたのであろう。日本にない概念や事物をあらわすには、中国語を借用したのであろうと思われるが、そうはいっても、金、銀、銅などはすでに日本にもあったのであるから、これはしかるべくしてなつた当然の一致であらう。漢語そのものが中国語から発しているものであるから、一致する訳語が多くても不思議はない。

B 西周の訳語と、前期の辞書の一部のものと一致するもの



(三〇語)

algebra	点竄	(英華 袖珍 英和字彙)
borough	邑	(英華 英和字彙)
bank	兩替	(和英語林)
custom	運上	(袖珍 和英 英和字典)
memory	記性	(英華 英和字典)
infinite	無疆	(英華)
perfect	十全	(英華)
prayer	神拝	(袖珍 英和字典 英和字彙)

これらはあまり多くはないが、前期の辞書にはみられ、しかも西周も使っている訳語である。今日からみるとやや特異であるが、当時は一般的な言葉であつたろうと思われる。

C 西周の訳語と一致する語が、前期の辞書にはなくて、後期の辞書にはあるもの(すなわち、後期の辞書が西周の訳を取り入れたのではないかと思われるもの)

a 後期の辞書(英和字彙二版 和訳英字彙 和訳字彙 新簡約英和辞典)すべてにみられるもの(四一語)

abstraction	抽象力	definition	定義
attention	注意	duty	義務
idea	観念	extension	外延

cell	細胞	faculty	能力
classification	彙類	function	官能
impulse	衝動	generalization	概括
concrete	具体	induction	帰納法
constitution	憲法	instinct	本能
consciousness	意識	institution	直覺力
deduction	演繹法	obligation	義務
observation	觀察	proposition	命題
philosophy	哲学	sensibility	感性
physiology	生理学	sociology	社会学
phenomenon	現象	space	空間
probable	蓋然	subjective	主観
principle	原理	synhetics	總合法
reduction	還元	time	時間
reason	理性	universal	全称

b 一部の辞書にみられるもの(一〇二語)

aesthetics	美妙学	(英和字彙 和訳英字彙)
axiom	单元	(英和 和訳英 和訳)
conclusion	断言	(英和 和訳英 和訳)
dynamics	動学	(英和字彙)

fancy	意象	(英和 和訳英)
mysticism	神秘学	(英和 和訳)
predicate	命証	(英和 和訳)
particular	特称	(新簡約英和辞典)
policy	政略	(英和 和訳英 和訳)
sortes	渾体	(英和 和訳英 和訳)
utilitarianism	利学	(英和 和訳英 和訳)
voltion	執意	(英和 和訳英 和訳)
statics	静学	(英和 和訳英 和訳)
subsumption	包摂	(新簡約英和辞典)
origin	濫觴	(英和 和訳英 和訳)
sensl	覚性	(英和字彙)
pain	苦痛	(英和 和訳英)
quality	形質	(英和 和訳)
natural law	性法	(和訳字彙)

英和字彙の初版と二版の比較の所で述べたように、これらの語すべてが西周の訳語で、しかもそれが後の辞書にとり入れられたとはいえないかもしれない。しかし、とにかく明治六年までの字書にはなかつた訳語が、明治十五年からの辞書にはあり、しかもそれと一致する訳語を西周も明治十年前後の著作の中で使つてい

る。著作の中には、公刊されなかつたものもあり、訳語のいくつかは一般の人の目にふれなかつたのであるが、ここでは、そのような詳しい事情は一応除外して、西周の訳語と一致する訳語が、後世の辞書にどのくらいあるかをみてみたのである。bに分類した語は、英和字彙二版や和訳英字彙、和訳字彙など明治時代の辞書にはみられるが、今日の辞書にはみられないものが多い。今日ではどんな訳語が与えられているか、またどうしてそのようにかわつたかについては、後に考察する。

最後に、前期の辞書とも後期の辞書ともまつたくかわりのない西周独自の語をいくつかあげたい。これらは、意味的には通じるものが多いが、訳語としてはどの辞書にもみられないものである。

D 全く西周独自と思われる語 (九〇〇語)	
alchemy	化金延寿術 (鍊金術)
antecedent	前唱 (前件 前項)
archaeology	通古学 (考古学)
argument	拠証 (証明)
conquest	捷軍 (征服)
eloquence	好弁学 (雄弁法)

△西周の訳 V △普通の訳(主に現在) V

epic	賦詠体	(叙事詩)
essay	試体	(評論)
fatalism	厄運説	(宿命論)
mayor	市長	(市長)
metaphysics	超理学	(形而上学)
meteorology	晴雨学 気象学	(氣象学)
paleontology	古生物学	(古生物学)
scepticism	疑惑学	(懷疑論)

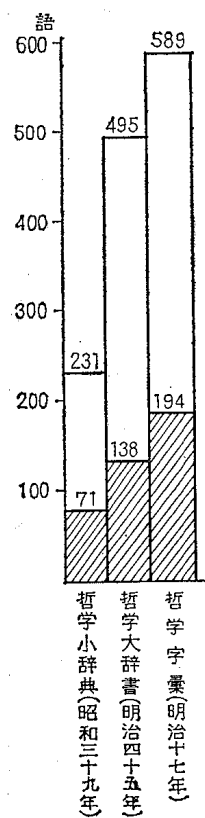
西周の訳語を、一般的な英和辞書と比較した結果として、次のようなことがいえる。

西周の全使用語一、四四一語のうち、前後の辞書とかかわりのある語は五四一語であり、九〇〇語は全く関係のない語である。かわりのある五四一語のうち、三九八語(七三・五%)は明治六年までの辞書の訳語と一致するものであり、だいたい一般的な言葉である。これに対して、前期の辞書にはなくて後期の辞書にはある一四三語は、やや特異な語が多く、西周の訳語がとり入れられたのではないかと思われるのである。

## (二) 哲学辞書との関係

西周の用語は各分野に渡っているけれども、特に哲学関係の語が多いので、一般辞書とは別に哲学辞書にあたってみた。その結

果は次のようになった。



註 数字は見出し語数を示す。斜線部はその訳語の西周と一致する部分を示す。

## A 三辞書すべてにみられるもの

abstract	抽象(的)	attribute	属性
abstraction	抽象力	beauty	美
actual	現実	classification	分類・彙類
affirmative	肯定	cognition	認識
analysis	分析	concrete	具体
a posteriori	後天	consciousness	意識
a priori	先天	creation	創造
custom	風俗	god	神
deduction	演繹法	good	善
definition	定義	history	歴史

duty	義務	humanity	人道
element	△元素	idea	觀念
experience	△経験	ideal	理想・觀念ノ
extension	外延	identity	×同一
fact	△事実	imagination	△想像(力) ×
generalization	概括	induction	帰納法
genus	△類 ×	knowledge	△知識 ×
judgement	△判断	perception	△知覚
liberty	△自由 ×	phenomenon	現象
matter	△物質 ×	philosophy	哲学
method	△方法 ×	principle	原理
molecule	△分子	probable	蓋然的
motion	△運動	proposition	命題
nature	△自然	quantity	△量
negative	否定	reason	理性
nominalism	名目学(論)	reciprocal	交互法(作用)
observation	觀察	relation	△関係
sensation	△感覺	substance	×実体
sensibility	感性	subsumption	包摂
sensualism	感覺学(論)	synthesis	總合法

soul	△×靈魂	time	時間
space	空間	truth	△×真理
species	×種	understanding	△×悟性
spirit	△×精神	will	意思(意志)
subjective	主観(的)	world	△×世界

註 訳語の上の×は英華字典にある訳語を、△は明治六年までに刊行された英和辞書にある訳語を示す。

今あげたもののうち、訳語の上に×や△の印がある語は、当時、すでに存在した訳語と考えられるが、それ以外は、西周が哲学関係の著作の中で使ったことによつて後世にも使われるようになったのではないかと考えられる。

#### B 一時通用、後廃語

井上哲次郎の哲学字彙(明治十七年)にみられ、明治四十五年の哲学大辞書や、今日の哲学小辞典にはみられない語には次のものがある。

axiom	单元	(——→公理)
civilization	開化	(——→文明)
condition	形勢	(——→条件)

△哲学小辞典▽

conclusion	断言	(→断案・結論)
existence	存在	(→実存)
function	官能	(→機能)
intuition	直覚(力)	(→直観)
natural law	性法	(→自然法)
sense	覚性	(→感官)

「單元」とか「開化」とか「形勢」とかが、語として全くなくなつてしまつたわけではない。ただ、“axiom”に対する、あるいは“civilization”に対する訳語としては最適とはいえず除かれたのだと思う。特に術語は限定性が要求されるため、言葉の意味内容が不明だつたり、漠然としていたりしては術語として適当でない。また、語そのものに古い感じが残つていたり、英語の意味と訳語の意味とが合致しないものなどは、やはりすてられる可能性が大きいのであろう。

## 二 使用訳語の存在有無について

### (一) 西周以前に存在していた語と存在していなかつた語

明治七年以前の辞書、すなわち英華字典、英和对訳袖珍辞書、和英語林集成(英和の部)、英和字典、英和字彙(初版)の五辞書に出ている訳語と一致する訳語は、西周が考え出したものではなく、当時すでに存在した語であると考えられる。また、和英語林

集成の和英の部に出ている語も、当時すでに一般に存在した語と考えられる。この点より、西周の訳語をみると、一、四一〇語のうち六二三語(四四%)は当時存在した語であり、残り七八七語(五六%)は当時の辞書にみえない西周独自の訳語と思われるものである。

註 第一章で述べた数一、四四一語より少ないのは、ちがう英語に同じ訳語を与えている(たとえば、poem, poetry, verse にそれ／＼「詩」をつける)ためや、熟語や句訳はある程度捨てたためである。

次に、西周の使っている訳語には、古い典故があるのかどうかを、諸橋轍次氏の「大漢和辞典」によつて調べてみた。その結果は下表のようになった。一、四一〇語のうち、「大漢和辞典」に出典の明記してあるものは八六三語で、全体の六一パーセントにあたる。このうち五二三語は、先の分類で当時の辞書に存在した語であり、残り三四〇語は西周独自の訳語とみなした語である。この結果より、当時存在した語の

		典故あり	典故なし	不 載
総 数(1410)		863 (61%)	187 (13%)	360 (26%)
内 訳	当時(623)	(523)	(74)	(26)
	西周(787)	(340)	(113)	(334)

ほとんどは典拠のある語であつたといえるが、西周独自の訳語の方は約半分が典拠のある語であり、約半分は典拠のない語と大漢和に載っていない語である。これら、典拠のない語と大漢和に載っていない語とを合わせた四四七語は、西周の造語といえるのではないだろうか。

次に個々について少し詳しくみてみよう。

### 1 当時存在した語で典拠のある語 (523語)

愛 愛国 青 赤 価 与ヘル 厚 集 安佚 異 硫磺 遺  
訓 位置 彝倫 盈虚 王 王国 加 海関 海軍 外国 海  
水 外部 解剖 化学 嫁娶 堅 寰宇 貴重 記念  
先に当時存在したとみなした六二三語のうちの八四パーセントにあたる五二三語は、このような語である。

### 2 西周独自と思われる語で典拠のある語 (340語)

この中には、第一章で後世の辞書が西周の訳を取り入れたとした語のいくつかが含まれる。これは注目すべきことである。

彙類 (列子 黄帝編)

意識 (論衡 実知)

義務 (論語)

運用 (宋史 岳飛伝)

觀察 (孔叢子 記義篇)

權利 (史記 鄭世家)

虚無 (史記 太史公自序)

注意 (史記 田完世家)

能力 (柳完元 牛賦)

分類 (張廷珪 彈碁賦)

原理 (玄理 張喬詩)

意象 (文心雕竜 神思)

演繹 (朱喜 中庸章句序)

官能 (礼記 孔子家語)

空間 (管子 輕重甲)

具体 (孟子 公孫王上)

現象 (実行経)

情緒 (江淹 泣賦)

先天 (易経 乾)

後天 (易経 乾)

理性 (後漢書 党錮伝序 小学嘉言)

これらは、ある英語に対する訳語として西周が使い始めて以来ずっと使われるようになったのであり、今日では訳語としての性質の方が強く、出典の方の意味と現在普通に使われている意味とはかなりちがうようである。たとえば、理性については、「後漢書」や「小学」に出ている「理性」は、「性をおさめる、性質を正す」という意味であり、仏教語としての「理性 (リシヨウ)」は「万物の本性」という意味である。従つて、今日一般に「理性的」などと使われる意味とはかなりちがうのである。西周によつて、生まれ変つた語といえるのではないだろうか。

### 3 当時存在した語で典拠のない語 (74語)

当時存在した語で典拠のない語は七四語で、当時存在語の一二パーセントである。それらを概念的にみると、キリスト教関係の語と自然科学用語が多いことに気付く。従つて、これらは、キリスト教とか西洋の自然科学が中国や日本に入つて来てから作られ

た言葉といえるのではないだろうか。

#### ○キリスト教関係

救世主 耶蘇 基督 福音 神学 三位一体 旧約全書

新約全書 唯一神教 聖差(使徒のこと)

#### ○自然科学用語

圧力 引力 滑車 感覚 結合 元素 行星 鉱物 鉱物学

酸素 実質 手術 小脳 触覚 水素 窒素 星学 動力

物質 分泌 摩擦 理学 酸化 電学 反射 燐酸 鎔解

キリスト教関係の語は、英華字典の訳語と一致するが、理科学用語の方は必ずしも一致しない。

#### 4 西周独自と思われる語で典拠のない語(113語)

西周独自と思われる訳語の一四パーセントにあたる一一三語は、大漢和辞典に載つてはいるが、典拠は明記されていない。しかも、それらの語の意味は、西周が使っている意味とほとんど同じである。もし、これらの語が本当に西周の考え出したものであるなら、一人の人のつくつた言葉が百余語も一般に受け入れられ、引き続き使われているということは、非常に特異な現象だといわねばならない。

外延 概括 蓋然 概念 還元 感性 帰納 交換 合成  
肯定 細胞 思考 主我 主観 純全 衝動 全称 総合

属性 体験 单元 断言 抽象 直覚 定義 哲学 転換  
特称 内包 能動 抱合 包摂 本能 命題 理想

以上がその主なるものであるが、これらは訳語としては英和字彙の第二版あたりからみられ、しかも哲学、論理学、心理学関係の語が多いことなどから、やはり西周の造語と断定して間違いはあるまい。このほか、

暗体 惡発 為郡 位立 塩素 演題 音字 懷念 確定  
角度 活機 現実 記載 極端 空理 語学 構文 首揆  
張力 定説 定例 必需 必須 直税

なども、大漢和辞典に典拠の記されていない語であるが、これらも、また西の造語であるかどうかは、やや疑問に思う。明治初年の英和辞書に訳語としては存在せず、和英語林集成にもみられず、さらに大漢和辞典にも典拠が明記されていない。しかし、たとえば「暗体」には、「漢詩の形式の一つ」、「惡発」には「宋代の俗語」という説明があり、大漢和辞典には典拠が記されていないが、相当以前から存在した語であると考えられる節がある。しかし、このような語は非常に少ない。

#### 5 西周独自と思われる語で大漢和辞典に載っていない語

西周の使っている訳語の中には、大漢和辞典に載っていない語も数多くある。大漢和に載っていないということは、そのような

語がかつて、社会に存在しなかつたことを意味するであろう。すると、これらは西の私的な用語であつたといえるのではないだろうか。

字観(space) 宙観(time)

覚性(sense, perceptibility) 捷軍(conquest)

渾体(sorites) 彼観(objective view)

識人(Prophet) 此観(subjective view)

外例(abnormal) 試本(essay)

月星(satellites) 卜算(chance)

光論(optics) 利学(utilitarianism)

space に対する「字観」、time に対する「宙観」、また「此観」

「彼観」の語など、まったく訳語造成の苦勞のあとがうかがえるではないか。これらの語は、言葉そのものこそ今日の訳語とは異なるが、意味的には通ずるものが多い。英単語の意味を考え、西周が訳語を造語したのだと思われる。

(二) 現在存在している語と消滅した語

西周が訳語として使った言葉が現在ど

		現 存	消 滅
総数(1,410)		893 (63%)	517 (37%)
内 訳	当 時 (623)	(561)	(62)
	西 周 (787)	(322)	(455)

<現存・消滅の関係>

のくらい残っているか、岩波の国語辞典によつて調べた。これは小さな辞典であるが、現在よく使われる語約五万七千を採録しており、普通に現存か否かをみるには十分だと思つたからである。

その結果は上表のようになった。

西周の全使用語一、四一〇語のうち八九三語(六三%)は現在も残っているが、五一七語(三七%)は現存しない。少なくとも岩波の国語辞典には載つていない語である。

現存する語を下表で詳しくみると、現存する語の六三パーセントにあたる五六一語は当時存在した語であり、残り三三二語(三七%)は西周独自と思われる語である。しかもその三三二語のうちの七割にあたる二四二語は典拠のある語である。残り九〇語は、大漢和辞典に載っていない語と載ついても出典の明記されていない語である。この九〇語は、西周

	当時存在した語 (623)				西周独自の語 (787)				総計 (1410)
	典拠あり	典拠なし	不 載	小計	典拠あり	典拠なし	不 載	小計	
現存	494	60	7	561	242	85	5	332	893
消滅	29	14	19	62	98	28	329	455	517

<現存・消滅と典拠の有無の関係>



の造語の中で現在まで生き残つたものとして注目しに値する。

熟字 死語 反証 外延 概括 蓋然 概念 確定 還元  
帰納 語原 空理 現実 公益 硬質 合成 肯定 細胞  
思考 主我 主観 総合 属性 感性 体験 单元 断言  
抽象 内包 哲学 定例 雷管 有機 包摂 本能 命題  
理想 特称 衝動 想念 直覚 定義 印象 心理学

これらがその主なるものである。

次に廃語になつた語をみると、その九〇パーセントちかくは西独自の訳語である。これは、個人の言葉は定着しにくいということの一つの証拠かもしれないが、「鬆性」、「識人」、「盪摩」、「套語」、「延嗣」など、よほど漢字に精通した人でないかぎりわかりにくい言葉が多いことを考えれば、これらが廃語になつたのは当然かもしれない。やはり、大漢和辞典にも載つていないような独自の用語は、無理があるものと思われる。

## 結 語

最後に、訳語として今日まで生き残っている語と途中で消滅してしまつた語との性格の相違を考えてみたい。

### (一) 明治初年の訳語

明治初年の訳語というのは、西周の訳語の影響が考えられない

明治六年までの辞書——英華字典、袖珍辞書、和英語林集成、英和字典、英和字彙(初版)——に、訳語としてすでにみられる語である。

#### 1 現在まで続いている訳語(二〇四語)

friction	摩擦	god	神
fraction	分数	gold	金
glass	硝子	good	善
history	歴史	hell	地獄
ground	地面	growth	成長
guardian	後見人	hard	堅い
husband	夫	music	音楽

これら今日まで続いている訳語は、一般的な語で当時から安定していたものに多いように思われる。このことは、訳語として使われなくなつた語がどんな語であるかをみることによつて、一層はつきりするであろう。

#### 2 途中で変化した訳語

bank	両替屋	替為座	→銀行	Bible	△聖經	→聖書
birth	△生産	→出産		cause	因縁	→原因
borough	△邑	→町・村		consul	商正	→領事官
custom	運上	→関税		planet	△行星	→惑星

dictionary △字彙→辞書  
paper money 楮幣→紙幣

botany 本草学→植物学

明治初年の辞書や西周の訳語にみられた語が、今日では訳語として使われなくなり、他の言葉にかわつたものの一例である。これらは訳語としても、また日本語そのものとしても失脚してしまつたものが多い。「両替屋」、「運上」、「因縁」、「本草学」などは、古いニュアンスが強く、新時代の新しい事物を表現するのには適当でなかつたのであろう。明治の開国が日本の歴史にとつて大きな変革であつたと同じように、日本語にとつても大きな転換期であつた。新しい時代に適應する新しい言葉が要求されたと思われる。

中国語(△印)もまたいくつかふるいおとされたが、今日まで残つた訳語に比べて、その数は非常に少ないようである。

## (一) 西周独自の訳語

### 1 現在まで続いているもの

#### ○論理学用語

affirmative	肯定	extension	外延
negative	否定	comprehension	内包
generalization	概括	deduction	演繹法
definition	定義	induction	帰納法

conversion 転換法

reduction 還元法

classification 彙類

subsumption 包摂

#### ○心理学用語

consciousness 意識

emotion 情緒

faculty 能力

#### ○哲学用語

abstract 抽象

a priori 先天

a posteriori 後天

idea 観念

ideal 理想

moral 道德

space 空間

particular 特称

universal 全称

proposition 命題

notion 概念

intuition 直覚(力)

instinct 本能

self-consciousness 自己意識

obligation 義務

philosophy 哲学

phenomenon 現象

principle 原理

reason 理性

subjective 主観

time 時間

これらはいずれも公刊された著作の中で用いられている訳語であるから、西がそれらの中で使つたことによつて、決定され固定された訳語であると考えられる。このほか、  
印象(impression) 衝動(impulse)

感性(sensibility)

能動(active)

観察(observation)

官能(function)

感覚学(sensualism)

なども、西の訳語が何らかの形で公けにされ取り入れられていつたと思われるものである。

ところで、西周という一個人によつて勝手に決められたと考えられる訳語が、今日まで生き残っているのはどうしてであろうか。まず第一に考えられるのは、それが術語という特殊な世界の言葉であるということである。術語は一般語に比べて、一度決められたら変りにくいといえよう。第二には、西周がこのような訳語を使う前には、適当な訳語がなかったということである。すなわち、英単語の意味の説明でなく、その訳語が必要とされた時に、適当な訳語を提供したのが西周だったのではないかと考えられる。

廃語となつた語のもつとも大きな要因は、それらの語が一度も公けにされなかつたということである。すなわち、公刊されなかつた著作の中でのみ使われている語がかなり沢山ある。また、公刊された著作の中で使われておりながら、しかも何ら顧られなかつた語は、すでに一般の訳語が固定していたり、西周の訳語があまりにも独創的であつたりした場合に多い。

生存語と廃語の決定的条件はつかめないが、全体的にみて、英

単語の意味と訳語の意味とにずれがないものは今日にまで残り、訳語の意味や意味する事物にずれがあつたり、言葉そのものが陳腐な感じだつたり、意味が曖昧なもの、概念のはつきりしないものは、他のより適当な語にとつて代られるということが言えそうである。

以上、西周の訳語を中心にみてきたのであるが、西周の博識と言語に対する強い関心と文学的素養は、新しい言葉をつくり出すために異常な能力を発揮し、よくその任を果したと思われる。今日我々がしばしば使う語で、しかも百年前の日本人の言葉の中には、従つて觀念の中にはなかつた言葉のいくつかが、西周という明治時代の一先覚者の手になる訳語であることを明らかにして、この小論を終る。

(昭四一 日文卒)